法然上人と吉水禅坊

藤島達朗

申上げようと考えておりますことは、所謂吉水の草庵と、それから最後に上人が御往生になりました大谷の禅坊との関係、並びにその位置等との事であります。従っていたって何と申しますか現実的な話しであります。よくいわれておりますように、法然上人は、安元元年、四十三歳にて、『法然上人行状画図』にいう「四明の巌洞をいで」即ち叡山の黒谷を出て、西山の広谷に先ず居を占められ、ついでやがて東山の吉水の地に移った。次第に、上人の教化がすすむと、そこから加茂の河原屋更に小松殿、勝尾寺そして大谷というふうに居所が変り、最後の往生の地は、大谷の禅坊である。この地は東西三丈あまり、南北十丈の狭い地であるが、この地に上人の塔を築いた。それが現在の知恩院の始源であるというのであります。このうち上人が、吉水の地に移られたということは、大たいの上人の伝記がすべて一致している。そうして又最後に大谷の地、或は大谷の禅坊に於いて御往生のことがあったというのも、諸伝同一であります。唯、問題は、吉水の草庵と、この大谷の禅坊との関係であります。今、浄土宗総本山知恩院の伝承によりますと、大体、吉水の地も、それから大谷の禅坊も、共にそれは現在の知恩院の上の

勢至堂、のちほど参詣することになりますが、あの勢至堂の地であったというのであります。併し今申しますように、はっきり既に『行状画図』が、先ず最初に吉水の地に落ち着かれた。そうしてそれから、加茂の河原屋、小松殿、そうして大谷の地に最後 御往生になったというふうに、次第に順を逐うてかいてる。これは、吉水と大谷の地が、別地であったと考えなければならないと思うのであります。このことは、現在伝えられております京都の古図――余り古い地図がないのですが、大凡室町時代のものの、後世の書写本が、『故実叢書』の中にあります。それによってみましても、大体、現在の知恩院のある所、その辺を大谷という。そうしてそれを境にしまして、それから東、大凡円山の西の辺迄を吉水と書いている。はっきりと吉水と大谷の地を区しているのであります。このことにつきましては、全体的に、この辺一帯の事をまず問題にせねばならぬのでありますが、もともと大谷という地名が、地形によることは申す迄もない、大きな谷ということであります。この辺の地形は、今の知恩院が、近世初頭――いずれ後に少し申上げることもあるかと思いますけれども、規模を大きくしました時に、全く一変してしまったのであります。大谷というふうな大きな谷のおもかげを、現在の地に於いて考えることは出来ませんけれども、今日もまいるかと思いますが、円山の上の辺、ずっと安養寺の北の辺の谷の具合、それから一心院の前に大谷川という小さな川がありますが、あの辺の様子など、やはり大谷というすがたを考えさすものがあるようであります。とにかく知恩院境内の拡張、徳川幕府が金と力とをもって、大きな工事をしましたため、文字通りあの辺は一変されておりますのですが、大凡位置はあの辺一帯と考えられるのであります。それから吉水と申しますのは、よいきれいな水が出るという具体的な事実からきている。従って、大谷と吉水との地名はもともと地名の性格が違うそれ故それは必しも同一の場所であって悪くはない。そのずっと古い所を考えてみますと、どうも大谷が或は吉水といわれ、そうして又吉水全体を、大谷といっている形跡がある。そのようにどうも考えられるのであります。即

ち必ずしも吉水と大谷とは、区別しておらない時期もある。先ほどお話しがありました慈鎮和尚は、大体青蓮院では最も有名な方であります。が、この方を、吉水僧正ともいう。もっともこれは、吉水の禅坊のありました辺に、和尚が吉水坊という坊室を設けられ、そこにいられることが多かったところから、そのように呼んだのでもありましようけれども、然しなお全体的に、「吉水新宮」新らしい宮というのがみえ、それは尊勝院をさしていると思われますがやはり今の青蓮院の少し西南の方に、古地図にはのっているのであります。だから必ずしも大谷と吉水とを截然と区別しておったというわけではなくて、あの辺一帯を全体的に、或は大谷といい、或は吉水と称したのが、最初であろうと思うのであります。しかしそれが漸次分れて来た。もともとこの吉水という名前がおこったとするところの水の出る場所が現にあります。これも、のちほど一緒にまわることだと思いますけれども、今の安養寺の下、円山公円からずっと上ってまいりますと、弁天堂があります。その弁天堂の後に池があり、現に水を出しておりまして、それだと伝えています。今はあまり吉水ではありませんが、古くはそれは清い水をたたえており、青蓮院の歴代門主の一代初度の行法にはこの水を閼伽の水としてくむ儀式があったと伝えます。この吉水の出る場所を中心に、次第にその西南の辺一帯が吉水ということになり、それからそれより東北を大谷というふうに、漸次なってきたと思われるのであります。今申しまする法然上人が、吉水に地を占められる頃には、大体今の知恩院の辺が大谷であり、それより少し南西の辺を吉水というように、大凡区別ができておったのでないかと考えられます。『親鸞伝絵』下の最後の段に御存知の如く「文永九年冬此、東山西麓、鳥部野北、大谷の墳墓をあらためて、同麓よりなお西、吉水の北辺に遺骨を掘渡して仏閣をたて影像を安す」とあります。この最後の場所が現崇泰院の地と考えられますから、吉水はここから南であり大谷はそれより大たい東の方にあたっていなければならぬと思われることです。

さて、法然上人は、吉水に先ず入られたのでありますが、これは一体どうしてそうなったかということが、問題になります。そう簡単に何処へでも行って、すぐに坊舎が建てられるものでないことは、いうまでもない。京都に限らず、天下何処だといって、もう既にこの頃になりますと、尺寸の地でも、所有者とその本所はきまっております。『行状画図』に従えば、簡単に坊舎を建てられたようにかかれてあり、又後の諸伝には、慈鎮和尚の好意によるものだともいうております。なおそれから四十年ばかり経って法然上人が大谷の禅坊で御往生になる。その前一寸三ヵ月、流罪赦免の後に、あの摂津の勝尾寺から帰えられ、そして大谷の禅坊に入られるのですが、この際もやはり慈鎮和尚の好意による、特に、この後の場合、所謂大谷禅坊に関する限り、諸伝は悉く、慈鎮和尚の好意によるということをいっているのであります。しかし、最初の吉水草庵の場合は、そういうことを書いたものは、これは少し後のものでありまして、早いところのものは、そのようにはいってはいない。とにもかくにも、その当時から、大体近世初頭にかけまして、この辺一帯の所謂本所が青蓮院であることは、これはもう間違いないのであります。しかし直接の所有者は、別個にあるので、それは一体誰であったかということにつきましては、田村円澄氏は、法然上人に『没後遺誡二箇条』というものが伝えられており、それによって次のようにいわれている。もともとこれには建久九年四月八日いう年月日が入っており、一寸早や過ぎるようでありますけれども、先ず死んでから後、追善供養はする必要がない。それから今一つ、自分のいた大谷の禅坊を含めて場所なり、本尊なり、或は経巻なり、それぞれを所謂形見分けするということが書いてある。その中に、吉水に三坊あり、東の新坊、中の坊、西の旧坊という。そうして中の坊を、感西上人に伝える。東の新坊は、円親という方であります。それから西の坊を、あまり有名な方でないので、一寸今はっきりしませんが、長尊と申しましたか、そういう方に、それぞれ伝えるとかいてある。で田村氏は、中の坊の感西の場合は別だが、それ以外の場所は、それぞれの本当の土地の所有者

だったのだ。法然上人が、はじめてその地を占められた時に、その土地を提供したのだ。従って没後はもとの所有者にそれをかえされることになったのであろう。その前文に、入室の弟子七人というてその名がのせられているが、その中で、名の聞えているのは、信空・感西とそれから西山上人の証空の三人である。あとの四人は殆ど無名の人ばかりである。そのような人を入室の弟子であるとし、更にそれらに譲られたというのは、右の理由によるのであろうというていられるのです。しかしこの遺誡文は、田村さんも疑っておられる。今のような入室の弟子中に、もう既に普通じや考えられない人達がいるということ。それから文章にどうも法然上人らしからぬものが色々ある。元来法然上人は、あとをとどめぬといわれた。あとをとどめれば、念仏が一所に停頓すると、従ってそういうことを書かれる筈はない等々、疑問を提出しておられるのであります。ところで親鸞聖人は『西方指南抄』の中に、これを入れられている。併しおかしいことに『西方指南抄』の『没後遺誡文』は、右の二条のうち初めの一箇条、追善葬祭の事、この一条しかのっていない。あとの形見分けの事については、全然聖人はかいておいででない。私はここらにやはり問題があるかと思うのであります。併しとにかく親鸞聖人があの『西方指南抄』を書写されました御年八十歳から九十歳位迄の間には、大体法然上人『没後遺誡文』なるものが、伝えられていたことは、認めなくてはなりますまい。しかしそれについて親鸞聖人が二箇条あったうち、一箇条しかかかれなかったということに、私には、実はやはりそこに何か問題があるように思うのです。即ちその形見分けということと、更にはそこにかかれる吉水の中の坊、或は東の新坊、西の旧坊というものの存在が、充分問題になるようであります。今の田村さんの考察も、初めは全体を否定しておられるけれども、再応、その否定をおいて、中にかかれてある事から、それを資料にして、これらの人々が、上人に寄付したんだ。土地を提供したのだといわれるのでありますが、この辺疑った資料によって、どうもそういう説をなすことは余りいいことではないのでないかと思います。でこれ

らは、そのままおいて、さてはじめの慈鎮和尚の好意によってということですが、これもどうも考えられないようであります。これはあとの大谷の禅坊の場合でも同じことであります。さきほど慈鎮和尚についてお話しがありましたが、一般的に常識的には、慈鎮和尚が浄土教や法然上人についてどういうふうに考えていられたかといいますとそれは『愚管抄』なんかによります限り、御存知の如くあまり好意的ではない。殊にその最後、遂に大谷でもって往生した。往生々々といい、人は沢山集まったが、さしてたしかなことはなかったといって、一寸冷笑気味であります。そうして更に具体的には青蓮院を管轄される慈鎮和尚の時期が一応考えられる。勿論安元元年の四十三歳にして山を下って、居を吉水に占められる当時は、まだ慈鎮和尚は、青蓮院に入っていられない。更に最後の建暦元年十一月二十五日、法然上人が流罪赦免によって京都に入って来られた時、その時慈鎮和尚は、二度目の叡山の座主をやめていられる。そしてあくる年の建暦二年の正月の二十五日に、法然上人が御往生になる少し前の十六日に、三度目の座主に就任しておられるのであります。だから法然上人が帰京された時には、一応所謂三度目の座主還補の前であります。併しだからといって、必しも慈鎮和尚がここにいられなかったということにはならないともいえる。殊に吉水の坊を建られ、そこには大体長くいられた形跡もありますから、従って座主還補前だからという て、いられないということにもなりますまいけれども、併しやはり常識的には座主でないのだから、いられなかったとすべきでしょう。今もお話しがありましたように、慈鎮和尚は、屢々京都の西山に隠遁されるのであります。やはりそういう時期が実はそれから後もありまして、西山に住まれることが多かったようであります。でとにかく法然上人が、大谷に帰られた当時、慈鎮和尚がそれに好意をもって、その地を提供されたというようなことは、あれこれどうも一寸考えがたいのであります。しかし慈鎮和尚が関与されようと、されまいと、本所青蓮院が何らかの形に於いて、それに好意を示さなければ、そういうことは成りたたない。これは当然であります。従ってそうい

うことがやがて慈鎮和尚という事になって語られて来たのでないかと思われるのであります。

さて、この吉水の地、土地の問題ですが、さきに申しましたように、どうも大谷の地とそれから吉水の地とは、別箇に考えるように、その頃にはなっている。『行状画図』が吉水の地に草庵を築かれたと初めにいって、やがて加茂の河原屋、小松殿と移って最後流罪赦免後に大谷に落着かれ、そこで御往生ということにしていることからも、やはり別箇だと考えなければなりません。さきの吉水の名のおこった伝えをもっております池、青蓮院や知恩院よりもっと南、円山公園の上の弁天堂のところの池、その場所がそのまま古いものを伝えているとは、簡単には申されませんけれども、大体あの辺から南西の地が吉水ということになる。現在安養寺という寺が、あの弁天堂の上、ずっと高い所にあり、それを、所謂吉水禅房の跡というておるのでありますが、安養寺なるものは古いところどうもはっきりしません。あの東山一帯は所謂三昧所即ち墓所であります。その墓所の中に点々として供養所のようなものが、次第に設けられたのだと思われる。『明月記』に承元二年五月十二日、招請に依り、八条院の西の御方の大谷堂供養所に向うという記事があります。このような供養堂に叡山の隠遁者達が偶居するようになった。そ次、漸寺として発展した、そういうことであろうと思うのであります。安養寺がはっきりしますのは、それは南北朝で、一遍上人系時宗の国阿上人が、東山に根拠し盛んな勢をもって教線を展開される。その時に東山のこの安養寺、それから隆寛律師で有名なその南の長楽寺、その又少し向う、現在、東大谷の下にある雙林寺、更に南の霊山正法寺等これらが全部国阿上人の傘下に入りまして、沢山な人々を集めたのであります。これらもと天台系であったのが、それですべて時宗になってしまった。そしてやがて応仁の乱火に会いまして一時全く退転するのでありますけれども、安養寺は寺伝でありますが源昭という琵琶法師がおりまして、その発願で、一時京都の市内へ移っていたのを、再び、元の地に復興したというのであります。それは近世の初頭であったかと思われるのですが、爾来

この寺はこの地の景勝と祇園感神院をひかえていることで、多くの都の人々を集めました。そして何時しか安養寺や長楽寺は、所謂遊山所、つまりなんといいますか、リクレイションの場になってしまうのであります。この頃安養寺内の六坊と申しまして、六つの坊、それらが文字通り料理屋になり、比丘尼が給仕をし、飲食を供するという形になっているのであります。六坊の一つののこりが現在の料亭左阿弥であります。それは長寿庵と申しました。なおあの辺にこれは今から三十年程前、私らが学生時代には也阿弥（多福庵）の名を伝える料理屋がありました。その他正阿弥（勝興庵）連阿弥（延寿庵）眼阿弥（多蔵庵）端寮（花洛庵）を以て六坊といいます。これらで安養寺は、近世以降世俗的な意味に於いて、随分繁昌しているのであります。ところでこの安養寺が吉水草庵址ということですが、どうも今の安養寺の地では、さきに述べましたことからすると、少し高所すぎるように思われます。恐らくはあの下の台地の辺から、大体、さきの三坊、中坊、東新坊、西旧坊その三坊を何処迄信じていいか問題であることは、先程申上げた通りでありますが、しかし『七カ条制誡戒』によりますと、百九十名の人々が署名している。しかしあれは皆其処におったというわけではないので、それぞれ分散しているのが集まって署名をしたと考えられる。が第一日目は八十人で、これは恐らくその場におった人々でないか。つまりその七・八十人はいる位な、吉水の草庵をその頃に考えていいのではないか。そうすると、三坊位必要でないかとも思われます。この三坊について、大体知恩院の伝承は、中の坊は大体今の勢至堂の地、それから東の坊は、今の大鐘、鐘楼堂の辺、そして西の坊は、山門の西の辺であるというのであります。これは成るべくそれらを知恩院の境内にて全部考えようと意図されているようであって、どうもそのままには受け取り難い。先程の京都の古地図によりますと、大体、今の安養寺の下辺からずっと並んで、東、中、それから丁度あの山門の辺から一寸南にかけまして、西坊と大体三つ並んで書れています。大体これが古いすがたではないかと思われます。即ち大凡今の安養寺の下、台地になっていま

して桜とベンチがある。あの辺から下の方がそれでないかということを考えます。

次に最後の大谷禅房、これはやはり現在の勢至堂の地であることに、間違いないのではないか。『行状画図』によると上人が帰京されまして、その十二月二十五日に既にあの地の東の山ぎわを廟所として、上人は定めておかれた。それは南北十丈、東西三丈のほんの狭い地であるが、しかし高所で景勝の地であるという。今はずっと西に木がしげり、あまり眺望はありませんけれども、中々いい所であります。東西三丈南北十丈も大体現在の地にあてはまるようであります。そしてその下方の地一帯が法然上人の最後の大谷禅坊の跡であったであろうことは、廟所との関連に於て大体間違いないと思われます。唯しかしこれは現在浄土宗内でも問題にされる向がありますけれども『行状画図』その他に従いますと、法然上人の墓所は、嘉禄の法難で山徒のためあばかれようとした。そこで上人の遺骸をそのまま太秦に運びやがて後、粟生の地で遂に荼毘に附した。その舎利、遺骨を、粟生の幸阿弥陀仏が預っておったけれども、これを嵯峨の正信房が幸阿の留守に奪い、嵯峨の二尊院内に、雁塔を設けて、安置したというのであります。

『行状画図』にしてそれきりなのです。それを何時どうして更に此処へ運んで来たか、そのようなことは全然みえない。そこで、知恩院の法然上人の廟墓と上人の御遺骨を問題にするのであります。がこの嘉禄の法難後文暦年間に、勢観房源智上人に依って右の地に廟塔がととのえられ、そうして坊舎も設けられた。やがてそれが大谷寺或は知恩教院とよばれることとなって、後世発展してゆくのでありますが、その劃期は先程申しました、近世初頭、慶長八年からの、あの知恩院の大拡張であります。これは徳川家康の母伝通院が、伏見城で慶長七年に死にますとその葬式を知恩院で執行しました。徳川家の宗旨は、浄土宗であります。そこでそれを機にこの知恩院の大拡張を企てたわけであります。あとから宮崎先生の話しもあるかと思いますけれども、もと大谷の親鸞聖人の廟所あと現

崇泰院の背後に直に亭々たる石垣が迫っている。あれで随分ひどい谷間、勾配を埋めたものであることがよくわかります。知恩院の一宗の地位について一言しますと、大体法然上人直後は、京都では、しばらく西山系統が圧倒的であり、鎮西系統としましては、清浄華院の向阿上人の活動が顕著であります。そうして更に百万遍知恩寺が有力、知恩院は廟所いうだけで、寺としての勢力はあまりなかった。唯やはり青蓮院が陰に陽に知恩院を庇護しております。殊に大永年間百万遍知恩寺の伝誉が、浄土宗の本寺を百万遍にしようと企てた。これについて、青蓮院の尊鎮法親王が憤慨され極力それに反対されるのですが、どうも形勢が悪い。憤激のあまりとうとう親王は高野山に籠居される仕儀となった。そこで叡山が騒ぎ出し、やっと伝誉の非望はくじかれ、改めて知恩院が一宗の本寺であるということを確認されるのであります。後相原天皇の時のことであります。続いて天文年間には正親町天皇より「毀破の綸旨」というのがおりまして、これでもってはっきりと、一宗の本寺に確定するのであります。そしてこれを内容外観共に確実にしたのが、前述の近世初頭の知恩院の大拡張であります。やがて徳川幕府は後陽成天皇の皇子を拝して宮門跡とします。所謂知恩院宮、華頂宮がこれで、初代良純法親王以下明治の初め迄連綿としてつづいたのであります。なおいろいろ申さねばならぬことがあるかもしれませんが、現地へ参りましてその都度申し上げましょう。何か話が前後しましてお分りにくかったと思いますけれども、大体吉水草庵の地と大谷禅坊の地とを現在考えられる範囲に於いて申上げたことであります。失礼いたしました。